

自民党実力者たちに聞く

聞き手・東京大学助教授 寺沢 一

池田内閣の官房長官時代に、佐藤栄作、河野一郎、藤山愛一郎らの実力者と並んで受けたインタビュー。大平は池田内閣の政治姿勢、日中間係、戦後の内閣を率直に論じている。寺沢氏は現在、東大、独協大各名誉教授。

病理状態にある日本

低姿勢の演出者として低姿勢をどう思つか、あるいは、池田さんがアメリカ力訪問から帰ってきてからも、続けられるのかどうか、その点からお話をいただきたいのですが……。

大平 わたしはこう考えるんです。だいたい日本の現状の規定というか、どう見るかという見方です。これはイビツな、正常な姿じゃないわけです。戦争に対する反動、戦時統制に対する反動、それからまあ、りっぱな、善良な市民というものを前提にした民主憲法、そしてその下においてあらゆる勢力が野放しになっておる状況、これはまあ、いわば日本はまだ振り子がおさまっていないと思うんですよ。いわば一種の病理状態にあるんだ、という考え方です。これをおさまるところへおさめるに

は、もつと時間がかかる。もつと辛抱がいる。戦後一六年ですが、長いと思わんです。で、これを治療してかかるには、まあ端的にいえば、一つのはれものを治療する場合に、ウミを全部しぼりとなおすのが早いか、自然に体内から出てくる回復力というものを辛抱強く培養していつて、病気をだんだんだんだん、なおしていくような療法がいいのか、ということを考えますと、わたしどもは後者のほうがより効果的で、より早くなおるんじゃないかと、こつこつ認識ですね。

したがって、そういう考え方から現実の施策の順序をどうするか、それを実行するタイミングをどうするかという場合に、問題の根本は、民主的な日本をとにかく築き上げなきゃいかんということなんです。わたしどもは共産体制というのに反対です。これはもう、政治のアプリオリじゃないかと思うんです。だから、そいつに対する抵抗力、抗毒素というものをつくるのに、いちばん有利な戦略的地位を政府自ら持たないといけないと思うんです。そういう意味では、ぼくはことをあせらずに、辛抱強く積み上げていく努力が必要だと思っんです。

民主日本という、抽象的といえれば抽象的な言葉が出ましたけれども、たとえば民主日本の基礎になっている憲法なんか、どついつぶつに考えてお進めになるのですか。

大平 この点はまあいわば、戦後の不順な天候の間にね、一瞬青空が見えたということ、あの状況のもとで考えられる限りの、非常に理想的なヒューマニズムを打ち出した一つの芸術品だったと思うんですよ。だけでも、これはりっぱなもんですけれども、まあツ・アイディアリスティックという感じがする。しからば、これは日本のハダにあったように改定したいと思うでしょう。だけど、現実の改定というアクション 非常に大きな国民的な行事をいまの段階で用意して、それをにないきだけの体力があるかといつような判断になると、まだわたしは自信持てないんですよ。

60点主義で積み上げの努力を

長い目でじつと育てていくということになりますと、こないだの攻防法の取り扱いなんかも、もうやめる、急速な意味での治安立法はやめる、というふうなお考えですか。

大平 これは政府の問題でなくて、議員立法ですから、わたしからうんぬんすべきじゃないんですけれども、あれは、あそこに提案になり、ああいう事情で継続審議になっている以上、これは辛抱強く、順序を踏んで、仕上げるべきだと思いますね。

しかし、たとえば攻防法にしても、現行法で取り締まれることを、なんでもかでも新しい法律をつくる、という機運をかもし出してしまふ危険がありやしないか、そういう面も考えていただかないと……。

大平 わたしはあなたに同感なんだ。だから、選挙のときや通常国会に臨む総理の態度としては、治安立法やれというてないんだよ。ただどね、政治の現実については、やっぱり浅沼事件があり、岸事件があり、河上事件があり、嶋中事件があると、こういうものに対する何らかのアクションをとれという気持ちも国民の間にあるわけですね。それから、そのテロリズムが発生した遠因は何か、というところをいろいろ考えてみると、左翼の行きすぎたデモというものと全然無関係とはいえないということも、素朴な認識としてあるんですよ。

それで、そういう場合に、党の中に、なにかここでわれわれの手でやるうじやないか、ということが出てくるのも、これもむりからめことだと思っんですよ。そういう声が出て、一つの草案ができて、

ずいぶん三党の間で練って、それから世論の反響もずっとみてみますと、各社の論説も好意的でしたよ、ええ。したがって、わたしはこんどの取り上げかたが間違っておったとは思いませんよ。

ただ、時間をかけてとおっしゃる気持ちを通して考えますと、ああいう反対なり、デモが起こっている状態においては、なるべくもつとわからせるようにしてから、新しい立法というものはすべきたったと思う。

大平 ええ。わたしどもも、なんでもかんでも無理してまでやっちゃうんだ、というようなことになくって、いまあなたのおっしゃるような方向へ行つたほうが、問題はスムーズに解決すると思いませんがね。

それはやはり、総理のお考えと考えていいですか。

大平 え、これはちょっと微妙ですがね。やっぱり池田さんはわたしより一〇歳上なんですよ。池田さんや佐藤さんのジェネレーションというのを一〇歳とし下のわたしから見ると、やっぱりある種の距離を感じる、ぼくは。それで、十分いつてやるけれども、最後のいよいよ決断となると、やっぱり池田さんの全人的な決断になりますからね。とにかく、いま申し上げたようなくあいにはまいりません。

しかし、それがいわゆる歴史的实践というものでね。わたしは現実の歴史的实践というものは、八〇点はなかなかとれんと思うんだ。で、現実の採点はまあ六〇点とか、六二、三点とか、それから六二、三点のものを、どうして六五点にするかということがね、もつわれわれが命がけでやる問題じゃないの？ そついう感じだ。

長期政権は禁句

世間では、池田内閣はいつまで続くのかというふうに見ているのですがね。

大平 それは明らかです。それは組閣の当初から総理にもいつていているんだ。あんたもまあ赤ゲット組でじゃ、酒屋の次男坊が出てきて、まあ総理大臣になろうとも思わなかつたらう。そんだからね、きょう一日勤めて、夜、フトンかぶって寝るとき、オレはきょう、いったいベストを尽くしたかどうか、いっぺん考えなさい。そして、それだけでも満足じゃないか。そうしてそのあすの日、内閣が倒れてもいいじゃないか ということですよ。つまり、長期政権なんていうことは禁句です。それほど思わんのじゃ、思わんことにしている。

それは考えのうえではわかるのですがね。もちろん抱負というものもお持ちですし、新聞なんぞで読んでも、たとえば一〇年での所得倍増計画とか、いろんな政策があると思うのです。それと同時に、アメリカに出かけられる前に池田さんは記者会見で、池田というのは日本を背負って立つにふさわしい男だということをや、ケネディに見せに行くんだ、とおっしゃっていた……。

大平 そんなこというてたかな（笑い）。ただ、所得倍増計画というものはまあ日本の、歴史的復興期のエネルギーの展開の方式をつたったものであって、あれはみなさんが経済政策、所得倍増政策なんてとっているのは、間違いだと思うんです。あの中には、やはり日本民族の夢もあれば、希望もこめられている。もっとフィロソフィカルにとらえないと、あの味が出てこないと思うんです。

その次の問題は、それじゃ何か、こればかりじゃいかんじゃないかという問題が、こんどのいう

ところの新政策だ。しかし、だからといってこの新政策というものを出して、所得倍増をこれにひっかけて、これにしがみついて政権を確保していこう、とそんなチャチな気持ちはないんですよ。

日中関係は暫定解決で

中国政策についてうかがいたいのですが……。

大平 これは世界政治の綱の目の中から解決策を出していかなくやいかんので、これこそクリア・カットなんて、そんな手っ取り早くできませんわ。もう少し世界情勢全体の展開を見ないとわからんと思います。

たしかにそのとおりだと思うのですが、ハガチーさんとの対談の中で池田さんは、日本は特殊な立場にある、アメリカが中国に対してとくに憎悪感を持つているのと、逆な立場にある、むしろ親密感を日本はいだいているんだ、というようなことをいっておられましたね。ですから、とくに親密感をもっている国としてどうすべきか、ということがあるんじゃないでしょうか。

大平 ええ、各国はそれぞれの立場で、それぞれの感情があるので、日本は日本として、妙におし隠す必要はないんです。いうべきことは、いったらいい。そういうようなものを積み重ねていつの間、一つの暫定的解決策ができていく。根本的解決なんていうことをいうけれどもね、そんなものは概念論だね。歴史の実際は暫定的解決の積み重ねですよ。

暫定的解決の方式として、いま考えておられるのは、ただ民間の貿易だけじゃないですか。

大平 まず、いうところの民間貿易がろくすっぽできていない。できていないのに、また飛び越し

て、次の解決策を考えるのはふまじめですよ。先走った議論をする前に、民間貿易というものは政府として改善するといっているんだから、地道に積み重ねていくこと。えてして胸のすくような議論があるけれども、あんなものは百害あつて一利なしで、もっと現実はきびしいと思いますかね。

やめ方で光る鳩山内閣

戦後の歴代内閣 吉田、鳩山、石橋、岸内閣をどういふふうにご覧になりますか。端的なご自分の批評でけっこうです。

大平 そうねえ、吉田さんという人は非常にすぐれたリーダーだったと思いますね。戦後でもっともすぐれた指導者じゃないでしょうか。

それに、いまは「大磯の風」といふふうには、池田内閣に対しても、いろいろとアドバイスされたりするというようなことが伝わっていますけれども……。

大平 すぐれたリーダーのご意見をうかがうのは当然な話で、しかし、このすぐれたリーダーは、時の政権に対して、ああしろこうしろ、とかいう、ささいな指導をやるほど野暮じゃない。

鳩山内閣のメリットは、ぼくはやめ方がりっぱだったことだと思う。これは二年間の治政より、もっと偉大なものであったと思うなあ。そして、よろしく総理がやめるとき、政権がやめるとき、あああるべきだと思つな。石橋さんのやめ方もおなじように、政治家としては目立ったわけです。

やめ方がりっぱだったということで対照に出されるのは、昨年の岸さんの場合ですが……。

大平 岸内閣はね、非常に善意の内閣だったと思うんだ。しかしね、それを具現するやり方におい

て、岸さんのやり方がもつとあつたんじゃなからうかと、あとから考えて思いますけれども、その当時は、その状況において、だれがやってもあんなつたかもしれません。

七月の改造ですね。七月一七日で党役員の任期が切れるわけですが、新しい人を役員にする場合に、どんな考え方で選んでいくかという構想なんですがね……。

大平 これはもちろん、だれがやられてもおんなじでしょうがね。やっぱりいまの党がまとまって、そしていまからの政局をになうのにふさわしい人を選ぶことであつて……。

党がまとまつてということとは、党内の派閥間のチェック・アンド・バランスがとれるということも含めてですか。

大平 現実にはチェック・アンド・バランスも考えないかんでしょう。だからわたしは六〇点主義だといっているんで……。

いつも気になるのは、現実的だということそれまでだが、派閥なんです。佐藤さんも「派閥はやめるべきだよ。オレもポストだけれどもね」とおっしゃっていましたが……。

大平 わたしも佐藤さんと同感だな。派閥はもう限界にきましたね。いったい派閥がなんのためにできているんだというのと、やっぱり一つは人事的な推薦母体になるということと、第二に財政的な支援をもらえるということですよ。財政的な支援の面からいうと、派閥から皆さんが補給していただく金っていうのは、たいした金じゃないんです。それから、人事の面では派閥のことも考えないかんが、同時にやっぱり、有為の人材を登用するということにだんだんなつていけば、派閥はだんだん薄くなつていくんだし、まあ一種の派閥の反省期にはいつていると思うのですよ、ね、保守党が。